『破戒』

登場人物

丑松1
丑松2
丑松3

銀之助
お志保
敬之進

牛藤村1
牛藤村2

総ては今、この瞬間に起きている。
今、この瞬間こそが、過去や未来も変える可能性を秘めている。

【0】

お志保　はじめまして。私は小説「破戒」に登場するお志保を言う者です。
皆さん、ご存じかと思いますが「破戒」の作者は、島崎藤村です。
随分と前に書かれた小説ですので、古く感じる所もあるかと思います。
古さも文学的な味わいとして、受け止めていただけたら幸いです。
島崎藤村は、小諸に住んでいたことがありました。小諸での生活が「破戒」の世界観を作ったと思います。浅間山の雄大な自然と、そこに暮らす人々の営みに、島崎藤村は、豊かな時間の流れを感じたのだと思います。

【1】

牛藤村１　これは過去の物語である。過去には後の時代に取って、反省すべき事柄も多い。
過去こそ、真実であるからであろう。島崎藤村、作「破戒」。天長節の夜。
宿直の当番であったので、教員の瀬川丑松と土屋銀之助は小学校に残った。
牛藤村２　風間敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。
牛藤村１　宿直室の時計は九時を打った。丑松は見廻りに行き、二十分ほどで帰って来た。
銀之助　おい、どうした？
敬之進　顔色が悪いですよ。
丑松１　実は、不思議なことがあるんだ。
丑松２　校舎を廻って運動場に行くと、誰か呼ぶ声がする。それは、僕の親父の声なんだ。
銀之助　妙なことが有るものだな。
敬之進　どんな風に呼びました？
丑松３　丑松、丑松とつづけざまに。
敬之進　名前を？
丑松１　確かに呼んだんです。親父の声だった。
銀之助　お父さんは西乃入《にしのいり》の牧場だろう。あんな遠くから、まさか。
丑松２　また声が！もう一度行ってきます。
敬之進　どうも気掛かりだ。我々も行こうか。
銀之助　そうですね。
牛藤村１　丑松は、声のする方を辿って行った。
牛藤村２　丑松、丑松。
丑松１　おとっさん、おとっさん。

丑松２　また声が聞える。
銀之助　おい、大丈夫か？何も聞こえなかったぞ。
敬之進　吾輩にも聞こえない。きっと幻聴だよ。
銀之助　まあ、気にするな。ちょっと疲れているんだよ。
牛藤村１　翌日の朝。丑松は父の死を知らせる電報を受けとったのである。
父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなった。
牛藤村２　丑松、丑松、隠せ。たとえいかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと
決っして打明けるな、
牛藤村１　一時の感情や気の迷いで、この戒《いましめ》を破ったなら、世の中から
捨てられたものと思え。
牛藤村１・２　隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。
丑松１・２・３　おとっさん、おとっさん。

【２】

牛藤村１　蓮華寺《れんげじ》では下宿を兼ねた。丑松が急に引っ越しを思い立ち、
借りる事にした部屋は、蔵裏《くり》の続きにある二階の角のところ。
牛藤村２　その窓から、飯山の町並みや小学校も見える。夕方近くに丑松は町へ出かけた。
丑松１　本町の雑誌屋には、新着の書物を筆太に書いて張出してあった。
丑松２　かねて新聞広告で見て、出版の日を楽みにしていた「懺悔録」
牛藤村１　猪子蓮太郎、著。定価も書添えた広告が目につく。
丑松３　胸が踊るような心地がした。
丑松１　黄色い表紙に「懺悔録」としてある本。四十銭を出して買い求めた。
丑松２　本を抱いて下宿に帰って行く途中、学校の同僚に会った。
銀之助　瀬川君、大層遅いじゃないか。
牛藤村２　銀之助は、丑松から下宿を変えた話を聞いた。
銀之助　君はよく下宿を替える人だねえ。こないだ引っ越したばかりじゃないか。
牛藤村１　その時、丑松の持って居る本が目についた。
銀之助　「懺悔録」か。相変らず君は猪子先生のものが好きだな。まあ君は愛読を
通り越して崇拝だ、さぞかしまた、この本の事を聞かせられることだろうなあ。
牛藤村２　夕餐《ゆうげ》の煙は町の空をこめて、同僚の姿も黄昏がれて見えた。
丑松３　僕は、いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、
うろうろして、夜になれば、寝る。人を、こわがってばかりいる。
丑松１　僕は、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、
はっきりしない。淋しい顔をしている人が、偉そうに見えて仕方が無い。
丑松２　可哀想だ。人間が可哀想だ。みんな可哀想だ。

丑松３　僕は、人の真似をして、憎むの軽蔑するのと騒ぎ立てていただけなんだ。
実感としては、何もわからない。
丑松１　人を憎むとは、どういう気持ちか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、
何もわからない。僕が実感として、わかる情緒は、可哀想という思いだけだ。
丑松２　この感情だけで、生きて来たんだ。
丑松３　僕は、可哀想に思われて仕方がないんだ。
丑松１・２　可哀想に思われて仕方がないんだ。

【３】

牛藤村１　丑松は下宿の畳の上に倒れて、身動きもせずに考えていた。
牛藤村２　『懺悔録』は、我は穢多なり、という文句で始めてあった。
牛藤村１　我は穢多なり。同じ人間でありながら、軽蔑される道理は無い。
牛藤村２　過去の記憶が丑松の胸の中に生き返った。
丑松１　七つ八つの頃まで、よく他の子どもに調戯《からか》われたり、
石を投げられたりした、その恐れの情がふたたび起って来た。
丑松２　朦朧《おぼろげ》ながら、小諸の向町に居た頃のことを思い出した。
丑松３　『懺悔録』を読んで、せつない苦しみを感じた。
牛藤村１・２　丑松もまた。穢多なのである。

【４】

丑松１　校長先生、何か御用談中じゃ、ありませんか。
牛藤村１　いえ。別に。
丑松２　実は風間さんが、御願いがあるそうです。
牛藤村２　私に？何ですか。
敬之進　あの、ですね。少し。お願いしたいことがあまして。えっと。そのですね。
丑松３　そんなに遠慮しないで。
丑松１　私から伺います。風間さんのように退職となった場合には、恩給を受けさして
頂く訳に参りませんものでしょうか。
牛藤村１　無論です、そんなことは。
牛藤村２　小学校令の規則を出して御覧なさい。
丑松３　そりゃあ規則は規則ですけれど。
牛藤村１　恩給を受けられるという人は、満十五ヶ年以上在職したものに限った話です。
牛藤村２　彼は十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。
丑松１　でも、わずか半年のことで。

牛藤村１　それを許したら際限が無い。
牛藤村２　恩給のことは諦めて養生なさい。
丑松２　どうです、貴方からも御願いしてみては、
敬之進　いえ、今の御話を伺えば。お言葉に従って、諦めるより外はないと思います。

【５】

牛藤村１　もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校に居る頃から、気の合った友達だった。
牛藤村２　あの頃に比べると丑松は変った。以前の快活さを失った。
銀之助　どうにも気掛かりで、蓮華寺に尋ねて行った。苔蒸《こけむ》した石の階段を上り、落葉を掃いて居た寺男に、瀬川君はおりますか。と聞く、寺男は蔵裏の方へ見に行った。急に声がした。
丑松１　まあ、あがりたまえ。
銀之助　見ると瀬川君が二階の障子を開けて、顔を出した。私は暗い梯子段をあがった。
牛藤村１　机の上には『懺悔録』。
銀之助　よく君は引っ越して歩くね。部屋は、前の下宿の方がよさそうぢゃないか。
丑松２　ここの、鼠が多いのには驚いた。
銀之助　鼠？
丑松３　昨夜は枕元にも来たよ。今朝その話をしたら、奥様の言草が面白い。
丑松１　猫を飼って鼠を捕らせるより、自然に任せて養ってやるのが慈悲だ。
丑松２　食物さえ宛行《あてが》ってやれば、そんなに悪さする動物ぢゃない。
丑松３　うちの鼠は温順《おとな》しいから御覧なさいッて。そう言われて見ると、少しも人を恐れない。白昼《ひるま》ですら出て遊んでいる。
銀之助　奥様という人は変った人だね。
丑松１　普通の人より宗教的なところがあるのさ。
銀之助　他にはどんな人がいるんだ？
丑松２　子坊主が一人。下女。それに庄太という寺男。
丑松１　それから、風間さんの娘で、この寺に貰われて来ている、お志保さん。
銀之助　風間さんの娘が。
丑松２　そう。お志保さんは、僕たちの来る前の年に学校を卒業した人だよ。
お志保　明治元年。天皇陛下がご誓文を出されて、我が国は近代国家の仲間入りを果たしました。士農工商の身分制度の廃止。明治四年には解放令によって穢多、非人という身分の区別も廃止されました。我が国は天皇陛下のもと、総ての国民が平等なのです。と、私は学校で教わりました。でも、本当に平等なのでしょうか？

【6】

牛藤村1　一ぜんめし、笹屋。表の障子を開けて入ると、のみくいしている二、三の客。
牛藤村2　主婦《かみさん》は流許《ながしもと》へ行ったり、竈《かまど》の前に立ったりして、忙しそうに働いていた。
丑松1　主婦《かみ》さん、何かありますか。
牛藤村1　川魚の煮《た》いたのに、豆腐の汁《つゆ》ならごわす。
丑松2　そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。
敬之進　よう、めずらしい御客様が来てますね。
丑松3　風間さん、釣ですか。ちったあ釣れましたかね。
敬之進　獲物《えもの》なしサ。朝から寒い思をして、一匹も釣れない。
丑松1　とりあえず、一つ差上げましょう。
敬之進　君から盃を貰おうとは。道理で今日は釣れない訳だ。
牛藤村2　身を震わせながら、さも甘《うま》そうに地酒を飲む。
敬之進　我輩も学校を辞めてから、これという用が無いもんだから、釣なぞを始めた。
丑松2　この雪の中で釣れるんですか。
敬之進　素人はこれだから困る。冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。ナニ、風さえ無けりゃ、そう思った程でも無いよ。しかし、何が辛いと言ったって、用が無くて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。
丑松3　実は、こないだ、娘に逢いました。
敬之進　お志保さんに。
敬之進　娘の方から逢ってくれろという。もっとも、我輩もね、成るべく娘には逢わないようにしている。ところが何か相談したいことが有ると言うもんだから、久し振に逢って見た。もうどうしても蓮華寺には居られない、一日も早く家へ帰るようにしてくれ、頼む、と言う。事情を聞いて見ると無理もない。その時、我輩も始めてあの住職の性質を知ったような訳サ。
丑松1　性質と言うと？
敬之進　よく世間には立派な人物だと言われていながら、女というものにかけて、非常に弱い男があるものだね。蓮華寺の住職もやはりそうだろうと思うよ。娘はもう悲いやら恐しいやらで、夜も寝られないと言う。一日も早く引取りたいが、また娘が飛込んで来て見給え。八人の親子がどうして食えよう。娘に帰れとは言われない。先方が親らしい行為をしないまでも、これまで育てて貰った恩義も有る。一旦、蓮華寺の娘と成った以上は、どんな辛いことがあろうと決して家へ帰るな。そこを勤め抜くのが孝行というものだ。とまあ、無理やり娘を追立てたよ。
丑松2　知りませんでした、お志保さんがそんな辛い思いをしていたなんて。
敬之進　吾輩は情けない父親だよ。

【7】

牛藤村１　この大雪を衝《つ》いて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、
という噂は学校に居る丑松の耳にまで入った。
牛藤村２　その日は宿直の当番として、丑松と銀之助は学校に居残ることに成った。
牛藤村１　もっとも銀之助は用事が有ると出て行って、日暮になっても帰って来なかった。
牛藤村２　蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃、ことに烈しい胸騒ぎを
覚えて、何となくお志保の身も案じられる。さまざまな想像に耽りながら、
悄然《しょんぼり》とランプの火を見つめて居るうちに……お志保が入って来た。
丑松１　お志保さん、どうしてこんなところに。
お志保　何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。何故、優しい言葉の
一つも懸けてくれないの。何故、口唇《くちびる》は言いたいことも言わないで、
堅く閉じ塞がって恐れと苦しみとで震えているの。今の私を見て。
銀之助　見給え、君があまり沈んでるから、だから君は誤解されるんだ。
丑松２　誤解されるとは？
銀之助　君を穢多だなんて、実に途方もないことを言う人もいる。
丑松３　誰がそんな事を？
銀之助　僕は青年時代の悲しみということを考えると、いつも君の為に泣きたくなる。
実際、僕は君の心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄
せている。君から切出してくれると、およばずながら出来るだけのことは尽すよ。
牛藤村１・２　隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多の秘訣じゃ。
丑松１・２・３　おとっさん、おとっさん。
牛藤村１　丑松は自らの叫び声で、夢から目を覚ましたのである。

【8】

牛藤村１　月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。応接室の側の一間を自分の部屋と定め、
毎朝授業の始まる前には、そこに閉籠《とぢこも》るのが癖。
牛藤村２　それは事務の支度をする為でもあったが、又、一つには職員達の不平と煙草の
臭気《におい》とを避ける為もあった。
牛藤村１　戸を叩くものが有る。その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。
校長はこうして、お気入りの教員から報告を聞くのである。
牛藤村２　いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。
牛藤村１　勝野君。君は今、妙なことを言ったね。どうも君の話は解りにくい。
牛藤村２　一生の名誉に関わることを、迂濶《うかつ》にはしゃべれないぢゃ有ませんか。

まあ、事実だとしたら瀬川君は学校にいられなくなるでしょう。
牛藤村１　誰から彼のことを聞いたのかね。
牛藤村２　妙な人から聞きました。まあ代議士にでも成ろうという位の人物ですから、無責任なことを言う筈も有ません。
牛藤村１　代議士にでも？高柳利三郎か。
牛藤村２　まあ、そこいらです。ちょっとお耳を拝借。ヒソヒソヒソ。
牛藤村１　まさか！瀬川君が穢多だとは、夢にも思わなかった。

【９】

丑松１　とある店の横手に、貼付けてある広告が目についた。
丑松２　見ると政見を発表する会で、猪子先生の名前も一緒に書き並べてあった。
丑松３　会場は法福寺、その日の午後六時から開会するとある。
丑松１　日暮れを待って、人知れず猪子先生に逢いに行こう。
牛藤村１　こう考えて、蓮華寺に戻り部屋に居ると、奥様が入って来た。
牛藤村２　こんなことになりやしないか、と思って私も心配していたんです。
牛藤村１　と前置をして、奥様は昨宵《ゆうべ》の出来事を話した。
丑松３　日暮れ頃、お志保さんは郵便を出すと言って出たっきり、帰って来ないとのこと。
丑松１　箪笥《たんす》の上に置いて行った手紙は奥様へ宛てたもので。
丑松２　その中には、自分一人の為に様々な迷惑を掛けるようでは、義理ある両親に申訳が無い。などと書いてあった。
牛藤村２　心配で眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。父親《おとつ》さんの方へ帰って居るらしい。和尚さんだって眼が覚めましたうよ、今度という今度は。なむあみだぶ。
牛藤村１　奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。
丑松３　釣と昼寝と酒より外には働く気のない父親。
丑松１　あの家へ帰ったとしても、果してこれから、お志保さんはどうなるだろう。
丑松２　言うに言われぬ悲しい心地《こころもち》になった。
牛藤村２　急に丑松は壁を離れた。廊下を通り抜け、蓮華寺の門を出た。
丑松３　猪子先生の事を考えながら、千曲川の畔へ出た。先生に自分のことを話そう。
丑松１　煙る夜の空気を浴び、やって来る人影を認めた。演説会が終ったところだ。皆、激昂したり、憤慨したりして、聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。
丑松２　猪子先生の演説は深い感動を町の人々に伝えたらしい。
牛藤村１　宿に行って逢おう。こう考えて歩いた。表に立って覗いて見ると、取込んだことでも有るのか人々が出入して居る。亭主であろう男を呼留めて、蓮太郎のことを尋ねた。すると亭主の口から意外な報知《しらせ》を聴いた。

丑松1・2・3　法福寺の門前で猪子先生が襲われた。
牛藤村2　丑松は亭主の後について法福寺へと急いだ。
牛藤村1　丑松が駈付けた時は、間に合はなかった。聞いて見ると、蓮太郎は石か何かで烈しく殴られた。何の抵抗も出来なかったらしい。血が雪の上を流れていた。
牛藤村2　思わず蓮太郎の耳へ口を寄せた。
丑松1・2・3　先生。先生。
牛藤村1　蓮太郎の蒼《あお》ざめた頬へ自分の頬を押し宛てて、呼んで見ても、月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。
丑松1・2・3　先生、先生。
牛藤村2　そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せた。戸板に載せ、上から外套を懸けて、宿に向けて出掛けた頃は、月も落ちかかって居た。
丑松1　さくさくと音のする雪を踏んで、猪子先生の一生を考えながらついて行った。
丑松2　我は穢多を恥とせず。その言葉が心に浮かんだ。
牛藤村1　自分は隠蔽《かく》そうとして、その為に一時《いっとき》も自分を忘れることが出来なかった。自分で自分を欺《あざむ》いて居た。何を思い、何を煩う。
丑松1・2・3　我は穢多なり。
丑松3　明日、学校へ行って打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。
牛藤村1　丑松は新しい暁《あかつき》の近づいたことを知った。

【10】

牛藤村1　学校へ行く支度をする為、丑松は朝早く蓮華寺へ戻った。朝飯の後、机に向って進退伺を書いた。冬の朝日が射す障子を開けて、雪に包まれた町々を眺める。
牛藤村2　家と家との間からは小学校の建物も、朝日をうけた。しばらく眺め入って居たが、胸に浮んだのは『懺悔録』第一章、『我は穢多なり』と書起してあったのを今更のように新しく感じて、告白するように繰返した。我は穢多なり。我は穢多なり。
牛藤村1　蓮華寺の山門を出て、とある町の角で、向こうから巡査に引かれて来る男に出逢《であ》った。黒の紋付羽織、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、高柳利三郎と知れた。町の人々は猪子蓮太郎を襲った犯人だと囁き合っている。
牛藤村2　学校の運動場には雪が積上げてあった。
丑松1　玄関も、廊下も、広い体操場も、楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。
丑松2　授業が始まるまで、あちこちと廻って歩くと、大鈴の音が響き渡った。
丑松3　湧上《わきあが》る胸の想いを制《おさ》えながら、三時間目の習字を教えた。
丑松1　午後の課目は地理と国語だった。
丑松2　五時間目には、国語の教科書の他に、習字の清書、作文の帳面、そんなものを一緒に持って教室へ入った。

丑松３　教科書に取掛り、やがていつもの半分ばかり講釈したところで本を閉じ、少し話すことが有る、と言って生徒たちを眺め渡す。
丑松１　皆さんに少し話す事があります。
丑松２　私は皆さんに、別れを告げなければなりません。
丑松３　皆さんも御存じでしょう。
丑松１　この山国に住む人々を分けて見ると、おおよそ五通りに別れて居ます。
丑松２　それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶《ぼうさん》、それからまだ外に
丑松３　穢多という階級があります。
丑松１　もしその穢多がこの教室へやって来て、皆さんに国語や地理を教えるとしましたら、皆さんはどう思いますか、皆さんの父親《おとつ》さんや母親《おつか》さんは、どう思いましょうか。実は、私はその卑賤《いや》しい穢多の一人です。
丑松２　どうぞ私の言うこと、よく覚えて置いて下さい。これから五年十年と経って、皆さんが小学校時代のことを考える時に。あの教室で、先生に習ったことが有ったツけ。
丑松３　あの穢多の教員が素性を告白《うちあ》けて、別れを述べた事を思い出して頂きたいのです。私は卑賤《いや》しい生れでも、皆さんが立派な考えを御持ちなさるように、それを心掛けて教えた積りです。
丑松１　皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、どうぞ父親《おとつ》さんや母親《おっか》さんに私のことを話して下さい。今まで隠蔽《かく》して居たのは全くすまなかった、と言って、皆さんに告白《うちあ》けたと話してください。
丑松２　私は穢多です。
丑松３　不浄な人間です。
丑松１　許して下さい。
牛藤村２　教室に居る生徒は総立ちに成った。その時大鈴の音が響き渡った。教室の戸が開いた。他の組の生徒も教師も出て来た。
牛藤村１　銀之助は職員室で、丑松のことを耳に入れ、職員室を飛出した。
銀之助　玄関を横切って、左右に馳違《はせちが》う生徒の群を分けて、高等四年の教室に行ってみると、廊下のところに校長、教師五六人、中に文平も、その他高等科の生徒が瀬川君をとりまいて居た。君、大丈夫か？と話しかけると、瀬川君は懐から進退伺いを取り出して、こう言った。
丑松１・２・３　許してくれ給え。私は穢多です。
銀之助　君の決意はわかった。ここは任せて、帰りたまえ。
牛藤村２　丑松は、銀之助に促《うなが》され学校を出て行ったのである。

【１１】

銀之助　瀬川君はきっと、お志保さんの所に行くはずだ。
牛藤村１　銀之助は敬之進の住居《すまい》を訪れた。友達思いの彼は心配しながら、丑松を追って来たのであった。
銀之助　一寸伺いますが、瀬川君はこちらへ参りませんでしたか。
お志保　さっき御帰りに成ました。
銀之助　さっき？
お志保　瀬川さんは御気の毒な様子でした。私は穢多です、許してくださいと言って、出て行ってしまわれました。
銀之助　あなたも驚いたでしょう。
お志保　いいえ、前に勝野文平さんから聞きましたから。
銀之助　勝野君から？
お志保　瀬川さんのことを、それは酷い悪口を仰いましたよ。私は、気の毒でなりません。
銀之助　ほんとに貴方はそう考えて下さるんですか。僕は、瀬川君を貴方に助けて頂きたいと思っているのです。
お志保　私に？
銀之助　ええ。実は、瀬川君は貴方のことを大切に思っています。彼は自分の素性を考え、到底及ばない希望《のぞみ》と。それで貴方のところに来て、今まで隠していた素性を告白《うちあ》けたのです。もし貴方に瀬川君の真情《こころもち》が解りましたら、助けてやろうという考えを持って下さることは出来ますまいか。
お志保　もう私は、その積もりです。
銀之助　まだ近くにいる筈だ、一緒に探しましょう。

【１２】

牛藤村１　丑松は、雪の中を千曲川に向かって、歩いていった。
丑松１　おとっさん。
丑松２　私は戒めを、
丑松３　破りました。
牛藤村２　丑松、丑松、隠せ。たとえいかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決っして打明けるな、
牛藤村１　一時の感情や気の迷いで、この戒《いましめ》を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。
丑松１　私は、世の中から捨てられる。
丑松２　生きるのが、怖い。
丑松３　世の中が、怖い。
丑松１　人間が、怖い。

丑松２　流れる血が、怖い。
丑松３　私は殺されるのですか？
丑松１　なぜ、殺されるのです？
丑松２　人間ではないからですか？
丑松３　人間とは、何ですか？
丑松１　死ぬと、どうなるのです？
丑松２　おとっさん、答えて下さい。
丑松３　おとっさん、寒い。
丑松１　独りは、寒いです。
丑松２　死んでも独りですか？
丑松３　私は、ここで……死ぬのですね。
銀之助　瀬川君！
お志保　無事でよかった。
銀之助　助けに来たよ。
丑松１　助けに？
お志保　貴方は、もう独りじゃありません。
丑松２　独りじゃない？
お志保　そうですよ。
丑松３　ありがとう。

【１３】

牛藤村２　これは過去の物語である。過去には後の時代に取って、反省すべき事柄も多い。
過去こそ、真実であるからであろう。
牛藤村１　真実とは何か、考え続ける事が、新たな未来を開くだろう。
牛藤村２　そして瀬川丑松は、仲間の助けを借り、
牛藤村１　新たな広い世界へ、踏み出していったのである。
お志保　瀬川さんや銀之助さんとの出会いが、私の生き方を変えました。
今、この瞬間を大切にして、生きて行こうと思います。

おわり

原作　島崎藤村
戯曲　黒岩力也